

受動態と様態の副詞

小林 泰 秀

序

受動変形規則は *Syntactic Structures* で随意的変形規則として次のように書かれている。

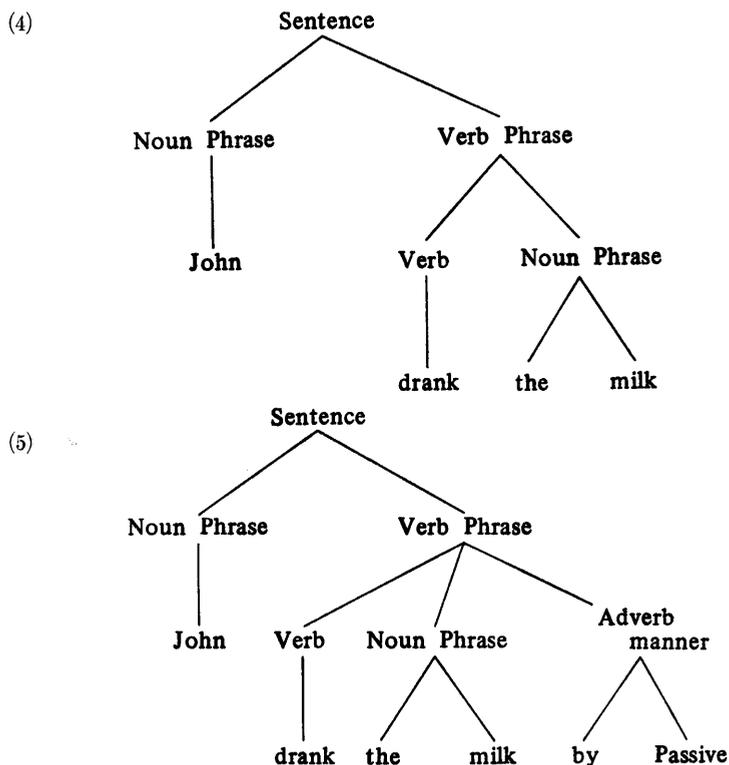
(1) $NP_1 - Aux - V - NP_2 \rightarrow Aux + be + en - V - by + NP$

しかし、Kats and Postal (1964) では修正され、能動態と受動態を同じ基底構造から派生されるとはしない。

(2) John drank the milk.

(3) The milk was drunk by John.

動詞 *drink* に対する *John* と *milk* の関係は(2)と(3)の文共同じ、つまり、*John* は動詞の主語（飲む者）であり、*milk* は動詞の目的語（飲まれる物）である。動詞に対する主語—目的語の関係を明確にする(2)と(3)の基底構造をそれぞれ(4)と(5)としている。



以上のように、Kats and Postal によれば、受動態の基底構造に by Passive があり、それを Adverb manner とし、Verb Phrase が支配している。

1年後の1965年、Chomsky は *Aspects of the Theory of Syntax* で、受動化は様態の副詞的語句 (Manner Adverbials) を自由に取り取る動詞に限られると述べ、次のように定式化している。

(6) Manner → by passive

(7) NP—Aux—V—……—NP—……—by passive

これは Kats and Postal と同じものであるが、Chomsky が Manner Adverbial とした理由は、様態の副詞的語句を自由に取り取らない動詞 (middle verbs (中間動詞)、*resemble*, *have*, *marry*, 等) は受動化変形を受けないし、又、前置詞句の中の名詞句でも、その動詞が様態の副詞的語句を自由に取りれるものであれば、受動文の主語になり得、疑似受動文 (pseudo-passives) が可能であるからとしている。

(8) a. John married Mary.

b. *Mary was married by John.

(9) a. Bill resembles John.

b. *John is resembled by Bill.

(10) a. They vehemently argued against the proposal.

b. The proposal was vehemently argued against.

(11) a. Everyone looks up to John.

b. John is looked up to by everyone.

(8) a の文は受動化出来ないが、次の(12) a は出来る。

(12) a. The preacher married John.

b. John was married by the preacher.

(8) の *marry* の意味は「結婚する」で、(12) のは「結婚させる」であり、*marry* の意味そのものが文脈によって異なる。つまり、(8) では動作主と動作を受ける対象物の関係がなく、(12) ではその関係がある為、様態の副詞的語句を自由に取りれる動詞ということになる。(8) と(13) は同様であるが、(12) と(14) は同義ではない。

(13) John and Mary married.

(14) The preacher and John married.

1. 様態の副詞とは

Kats-Postal-Chomsky の理論の問題点は Manner → by passive にある。まず何が様態の

副詞的語句かであるが、一般に、How…? という疑問文に対する答としての副詞、あるいは副詞的語句と考えられている。Kats and Postal は in+Determiner+Adjective+ly→Adjectively とし、Kuroda (1970) は in a Adjective manner は必ずしも Adjective+ly と同じではないと指摘しているが、いずれにしても How…? に対する答としての副詞 (的語句) と考えて良いであろう。How…? に対する答としての副詞がすべて様態の副詞という訳ではないが、この問題については後で議論する。

次の文を見てみよう。

(1) How did John marry Mary?

(2) John married Mary in a western $\left\{ \begin{array}{l} *way \\ ceremony \\ church \end{array} \right\}$.

副詞的語句 *in a western ceremony* はどのような様式で結婚したかを述べており、*in a western way* や *westernly* という英語はないが、結婚式のやり方を述べた様態を表わす副詞的語句と考えられる。*in a western church* は Where……? の疑問文の答としても出て来る副詞的語句であり、場所の副詞的語句とも考えられるが、この場合は How……? に対しての答であり、建物を指しているのではないので、*in a western ceremony* と同じ意味である。

様態の副詞的語句を取れない *marry* が(2)の文でそれを取れるのは、*in a western ceremony* が *marry* という動詞にかかるのではなく、*John married Mary* という文全体にかかるからである。従って、(2)と(3)は同じ意味である。

(3) John and Mary married in a western $\left\{ \begin{array}{l} ceremony \\ church \end{array} \right\}$.

しかしながら、*in a western ceremony* が動詞 *marry* にかかる場合、つまり、同じ VP に支配されている場合も考えられ、その場合(2)の意味は「John は Mary を洋式で結婚させた」であり、John は Mary が好まないかも知れないのに洋式で結婚したということになる。このように(2)の文はあいまいである。こういうあいまい性があるのは次の文からも分る。次の文(4)は John と Mary が結婚したのを前提としての疑問文であり、(5)はその答である。

(4) How was Mary married $\left\{ \begin{array}{l} to \\ by \end{array} \right\}$ John?

(5) Mary was married $\left\{ \begin{array}{l} to \\ by \end{array} \right\}$ John in a western ceremony.

to John の場合は動作主、つまり、*by the preacher* が省略されていると考えられるので受動文はもちろん可能であるが、*by John* も非文ではない。*Mary was married by John* が非文であり、(5)の文が文法的であるのは、*marry* が(2)の文と同様、様態の副詞的語句を取るからであると考えられる。

次の文の *marry* は様態の副詞を取り、能動態も受動態も可能である。

(6) a. John quickly married Mary.

b. Mary was quickly married by John.

(7) John and Mary quickly married.

(8) Mary was hurriedly married to John.

(8)の文は、結婚式が短い時間で挙行されたという意味になるが、(6)と(7)の意味はそうではなく、例えば、婚約してから結婚するまでの期間が短かかったのである。(6)は、*John* が *Mary* に早く結婚するようにしたという意味であり、動作主と動作を受ける対象物との関係がある。つまり、*John* は早く結婚したかったのだが、*Mary* はいつでもかまわなかったかも知れない。(7)の文は、*John* と *Mary* が共に早く結婚したのである。

Kats and *Postal* は次の文の *as well as Sidney* を Adverb manner としている。

(9) John plays chess as well as Sidney.

as well as…… は様態の副詞的語句というより程度の副詞的語句とした方が良いであろう。様態の副詞と他の副詞との区別は、大まかに、受動文に於いて *be* と過去分詞の間に来れない副詞は様態の副詞でないと云える。

(10) a. My father exclusively owns a store.

b. *A store is exclusively owned by my father.

c. A store is owned exclusively by my father.

(11) a. *John fluently speaks English.

b. John speaks English fluently.

c. *English is fluently spoken by John.

d. English is spoken fluently by John.

(12) a. John regularly studied Japanese very hard.

b. *Japanese was regularly studied very hard by John.

c. Japanese was studied regularly very hard by John.

(13) a. John smilingly said 'yes'.

b. *'Yes' was smilingly said by John.

c. 'Yes' was said smilingly by John.

(10)の *exclusively* は *my father* にはかかるが *own* にはかからないので様態の副詞とは云えず、(11)の *fluently* は How well…? に対する答となる程度の副詞であり、(12)の *regularly* は How often……? に対するもので頻度を表わす副詞である。(13)の *smilingly* は様態の副詞と考えられるが、*in a smiling manner* と考えず *with a smile* と考えれば、Manner ad-

verbial の状態を表わすものとして区別出来る。しかし、Manner adverbial を様態と状態に区別する必然性がどこまであるのかは明らかでない。

Manner→by passive の別の問題点は、様態の副詞(的語句)を取れる動詞のみ受動化出来ると解される点にある。動作性が弱く、状態性の強い動詞の中には、様態の副詞と共に起り得ないものがあるが、受動文は出来る。次の疑問文は不可能である。

(14) *How does Mary know John?

(15) *How does your father own a store?

know, own のような状態性の強い動詞は様態の副詞を取れないが、受動文は可能である。

(16) a. Mary (*ironically) knows John.

b. John is (*ironically) known $\left\{ \begin{array}{l} \text{by} \\ \text{to} \end{array} \right\}$ Mary.

(17) a. My father (*carefully) owns a store.

b. A store is (*carefully) owned by my father.

又、様態の副詞を取れる動詞が受動化出来るとは限らない。次の文は、動作を受ける対象物が無生物の場合である。

(18) a. John slowly reached out his hands.

b. *His hands were slowly reached out by John.

(19) a. John quickly drank two cups of coffee.

b. *Two cups of coffee were quickly drunk by John.

(20) a. John $\left\{ \begin{array}{l} \text{drunkenly} \\ \text{unconsciously} \end{array} \right\}$ struck the wall.

b. *The wall was $\left\{ \begin{array}{l} \text{drunkenly} \\ \text{unconsciously} \end{array} \right\}$ struck by John.

(18)~(20)は様態の副詞を取ろうと取るまいと、受動文の出来ない文である。しかし、云うまでもなく、無生物が受動文の主語であっても様態の副詞を取れる文も多くある。

(21) a. John carefully used the machine.

b. The machine was carefully used by John.

(22) a. A knife slowly sharpens a pencil.

b. A pencil is slowly sharpened by a knife.

この章の初めに、How……? に対する答としての副詞がすべて様態の副詞という訳ではないと述べた。次の疑問文の *How* は程度を問うものである。

(23) a. How do you like it?

b. I like it very much.

又、次の文では、*How……?* に対しての答に、手段の前置詞 *by* を用いている。

(24) a. How did John please Mary?

b. He pleases her by $\left\{ \begin{array}{l} \text{his joke} \\ \text{his humor} \end{array} \right\}$.

(25) bが答となる疑問文は、*How……?* ではなく、*In what way……?* である。

(25) a. In what way does John like Mary?

b. John likes Mary for her looks.

for her looks が様態の副詞的語句でないのは、*in what way* の *way* が *manner* の意味ではないからである。

以上述べて来たように、*How……?* という疑問文に対して、答として出て来るのが様態の副詞 (的語句) であるが、様態の副詞 (的語句) だけとは云えない。他の副詞 (的語句) も答として出て来るのである。更に $\text{Manner} \rightarrow \text{by}^{\wedge} \text{passive}$ によって、様態の副詞 (的語句) を自由に取り得る動詞だけが受動態を作れる訳ではないし、又、その動詞がすべて受動態を作れる訳でもない。今まで例を挙げて議論して来たように、受動化出来るが様態の副詞を取れない文や、様態の副詞を取る動詞でありながら受動化出来ない文もある。

2. 疑似受動文

Chomsky が $\text{Manner} \rightarrow \text{by}^{\wedge} \text{passive}$ を主張する他の理由は、前にも述べたが、その動詞が他動詞であるという概念と切り離して、その動詞が *Manner adverbial* を取れば受動化出来るという点にある。つまり、疑似受動文が可能なのは、その動詞が様態の副詞 (的語句) を取り得るからということである。更に Chomsky は、ある副詞的語句が VP に支配されるものであれば受動変形を受けられるが、述部句 (*Predicate-Phrase*) に支配されていれば、副詞的語句である $\text{by}^{\wedge} \text{passive}$ の後に来ることになるから受動変形を受けることが出来ないと述べている。

(1) a. John is working at this job quite seriously.

b. This job is being worked at quite seriously by John.

(2) a. John is working at the office.

b. *The office is being worked at by John.

(3) a. John decided on the boat.

b. The boat was decided on by John.

(1)の *at this job* は動詞句に支配されているが、(2)の *at the office* は動詞句の外にあり、述部句に支配されている為、(2) b のような受動変形は受けられない。(3) a の文の *on the boat*

は、どちらの句にも支配され得るといふあいまい性があるが、受動化出来るのは VP に支配されている PP でなければならないので、(3) b の文はあいまいではない。

PP が VP に支配されているのか、述部句に支配されているのかについて、Jacobsen (1977) は次のような例を挙げて議論している。

- (4) a. John has slept in this bed.
 b. This bed has been slept in by John.
- (5) a. A very poor family lived in the house.
 b. The house was lived in by a very poor family.
- (6) a. He shopped in the town.
 b. *The town was shopped in by him.

(4)と(5)は受動化が出来る為、*in this bed* と *in the house* は動詞句に支配されているが、(6)は、*shop* が *she shopped quickly* のように様態の副詞を取れるにもかかわらず受動化出来ない為、*in the town* は場所副詞句として述部句に支配されていると Jacobsen は述べている。更に彼は、問題のある文として次の文を挙げている。

- (7) *The hotel was remained in by my wife.
 (8) *England is lived in by some fifty million people.

(7)の *remain* は様態の副詞 (例えば *patiently*) を取れる動詞であるが、受動変形は受けられない。つまり、*in the hotel* は直接述部句に支配されている場所副詞句であるが、それでは場所副詞の範疇に関する構成上の定義が問題になると Jacobsen は述べている。(8)の文も同様であり、(5) b の文は文法的であるが、(8)は非文である。明らかなことは、PP が動詞句に支配されている語句なのか、述部句に直接支配されている副詞句なのかによって受動変形を受けられるのかどうか決まるのであり、前述の例でも分るように、様態の副詞をその動詞が取れるからでは必ずしもない。

次の文を見てみよう。

- (9) a. What is he working at?
 b. At this job/*At the office.
- (10) a. Where is he working at?
 b. At the office/*At this job.
- (11) a. What did he decide on?
 b. On the boat/ On breakfast.
- (12) a. Where did he decide?
 b. On the boat/*On breakfast.

- (13) a. What has he slept in?
b. In a bed/*In his uncle's house.
- (14) a. Where has he slept?
b. In his uncle's house/ In this bed.
- (15) a. What did he sleep on yesterday?
b. On a cot/ On a sofa/*On a floor.
- (16) a. Where did he sleep yesterday?
b. On the floor/ In the car.
- (17) a. What did he live in?
b. In a house/*In England.
- (18) a. Where did he live?
b. In England/ In the house.
- (19) *What did he shop in?
- (20) a. Where did he shop?
b. In the town.
- (21) *What did he remain in?
- (22) a. Where did he remain?
b. In the hotel.

以上の例から分るように、*What……preposition?* の答として出て来る名詞句は受動文の主語になれるが、*Where……?* の答として出て来る名詞句は受動文の主語になれる。つまり、*Where……?* の答としての前置詞句は場所副詞句であり、*by* passive の後に来て述部句に直接支配されている為である。(19)と(21)の文のように *shop* や *remain* という動詞と共に *What…in?* という疑問文が不可能なのは、*shop* や *remain* の次に来る前置詞句は述部句に直接支配されている場所副詞句であって、これらの動詞は、いわゆる伝統的に云われる目的語を取らない自動詞であるからである。

What…in? と *Where……?* に対する答としての名詞が、*sleep* と *live* の場合同じものであり得る。例えば、*sleep in a/this bed*, *live in a/the house* である。だからと云って、*This bed has been slept in by him* と *The house was lived in by him* の *this bed* と *the house* が述部句に支配される副詞句内の名詞句だとは云えない。動詞の次に来る名詞を話題の中心とする為、その名詞が主語の位置に移動するのが受動態であるので、必ずしも受動文の名詞句はその能動文の名詞句と形が同じではない。次の(23)の文は *What has he slept in?* に対する答ではないし、(24)の文は *What did he live in?* に対する答ではない。

(23) { **This bed** }
 { ?? A bed } has been slept in by him.

(24) { **The house** }
 { ?? A house } was lived in by him.

日本語では、「ゆうべ何に寝ましたか」とか、「何に住んでいますか」と云わないで、「ゆうべどこに寝ましたか」とか「どこに住んでいますか」と云うであろう。そしてその答は、「下のソファに寝ました」、「ホテルのベッドに寝ました」、「アパートに住んでいます」、「東京に住んでいます」等であるが、「ホテルに寝ました」と云えない。日本語では、「寝る」という動詞には、「どこに」と「どこで」の二通りがあるが、「住む」の場合は「どこに」だけであり、「どこに住みますか」という疑問文はない。英語には *What……in/on?* という疑問文があり、その答として使われ得る名詞の範囲は、例文に見られるように、*Where……?* の場合より狭い。つまり、*What……sleep in/on?* に対しての答には、寝る為の物や、通常寝るのに使われる物 (*bed, cot, sofa, 等*) が来なければならず、*house, floor, street 等* の名詞は答として妥当ではない。これは日本語と似ているが、英語の場合は *Where……?* に対しても *in this bed* や *on the sofa* の答が出て来る為、*What……in/on?* の方が、答として云われる名詞に、より制限がある。英語の *sleep* と *live* は *sleep a sleep, live a life* の意味もある為、*Where……?* に対しての *He slept in this bed* の意味を、「彼はこのベッドで眠りをした」とか、「彼はこのベッドで身体を眠らした」と解釈すれば、*in this bed* が場所を表わす副詞句であることが納得出来るよう。*Where……?* に対する答としての *He lived in the house* も同様に、「彼は家で人生を送っている」の意味に取れるので、*in the house* もやはり場所を表わす副詞句で、述部句に直接支配され、動詞句の外にあると云える。*What……live in?* に対しての答には、住んでいる建物 (*house, hotel, apartment 等*) が云われ、*England, Tokyo, town 等* の場所を表わす名詞は来れない。つまり、*sleep* や *live* に、より密接にかかわりのある名詞が来れ、これらの名詞は動詞と同じく動詞句に支配されている為、受動文が可能なのである。

しかし問題は、(15) a の *What did he sleep on?* に対して(15) b のように *On a floor* という答は出て来ないが、次の受動文は可能である。

(25) { **This** }
 { *A } floor was slept on by George Washington.

(15)と(16)の例から分るように、*on this floor* は場所を表わす副詞句であり、*this floor* は受動文の主語になれないはずである。*What did he sleep on?* に対する答の名詞は、前述のように寝る為の物、あるいは寝るのに使われる物でなければならないのであるが、(25)の文は *What……on?* に対する答の文ではない。(25)の文が可能なのは、*George Washington* が床に

マットを敷き、毛布をかけて寝た、つまり、ベット同様の寝れる状態にして寝たということが考えられる為、*cot, sofa, bed* のように受動文の主語になり得るのである。

3. 能動受動態

能動態と受動態の中間的な存在をなすものとして能動受動態 (Activo-passive) というのがある。これは、形は能動態であるが、意味は受動的である。

- (1) *The grapes tasted sour.*
- (2) *Books sold well.*

このように動作を受ける対象物が主語の位置に来る為、話者の観点は受動態のように動作主にはない。その為、動作主が文に表われず、*be + Ven……by + NP* という受動態の形にはなっていない。(1)の *taste* は状態を表わす動詞であり、(2)の *sell* は動作を表わす動詞である。能動受動文について議論する前に、能動受動文を作れる 2 種類の動詞について述べよう。

A. 状態動詞と動作動詞

状態を表わす動詞も動作を表わす動詞も共に SVO の文型を取り、様態の副詞を取れる。(6)の *build* は能動受動文を作れる動詞ではないが、(5)の能動受動文を作れる動詞 *grow* と構造上似ている点が多いので、共に挙げておく。

- (3) *John rudely tasted the grapes.*
 - (4) *John slowly smelled the tulip.*
 - (5) *John carefully grew the corn.*
 - (6) *John quickly built the house.*
 - (7) *John thoroughly spoiled the meat in the sun.*
 - (8) *John carefully sold books.*
- (3)~(8)の受動文も出来る。
- (9) *The grapes were rudely tasted by John.*
 - (10) *The tulip was slowly smelled by John.*
 - (11) *The corn was carefully grown by John.*
 - (12) *The house was quickly built by John.*
 - (13) *The meat was thoroughly spoiled in the sun by John.*
 - (14) *Books were carefully sold by John.*

目的語を修飾する形容詞を共なった文も文法的である。

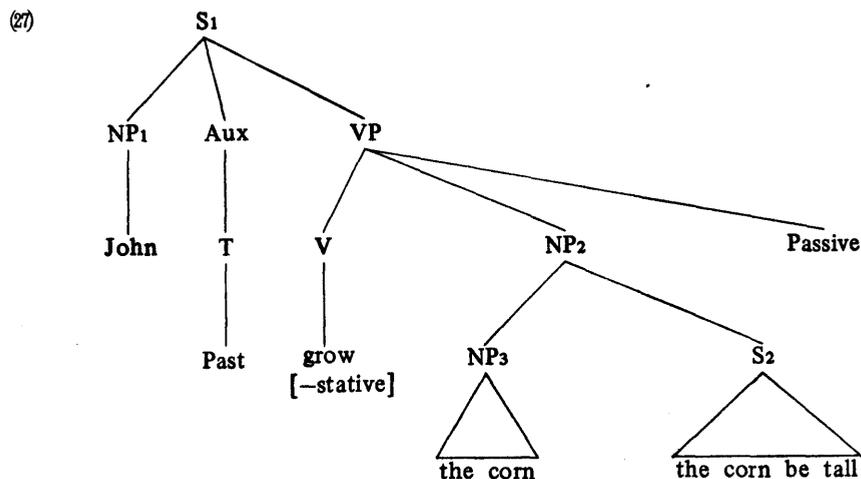
- (15) *John tasted the sour grapes.*

- (16) John smelled the sweet tulip.
- (17) John grew the tall corn.
- (18) John built the large house.

しかしながら、状態を表わす動詞はSVOの形を取れないし、その受動文も成り立たない。

- (19) *John tasted the grapes sour.
- (20) *John smelled the tulip sweet.
- (21) John grew the corn tall.
- (22) John built the house large.
- (23) *The grapes were tasted sour (by John).
- (24) *The tulip was smelled sweet (by John).
- (25) The corn was grown tall (by John).
- (26) The house was built large (by John).

状態を表わす動詞がSVOの形を取れないので、形容詞倒置規則 (Modifier Shift rule) が義務的だとすれば、(25)の基底構造は次のようにならなければならない。



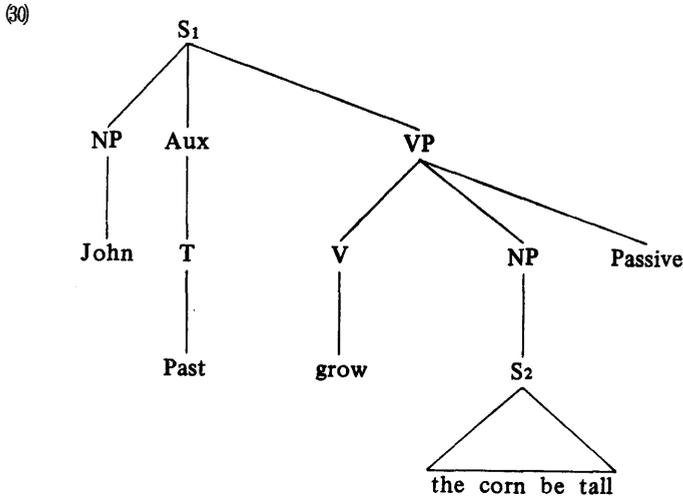
(27)の基底構造から(25)の *The corn was grown tall by John* を派生するには、まず受動化規則 (Passive rule) を適用して NP₃ を受動文の主語にし、次に同一名詞句消去規則 (Equi-NP Deletion rule) で S₂ の *the corn* を消去してから *be* を消去 (To-be Deletion) する。その他、補文化要素配置規則 (Complementizer Placement rule)、補文化要素消去規則 (Complementizer Deletion rule)、接辞変形規則 (Affix Hopping rule) 等が適用されるが、本論

文ではいちいち述べない。以上のように(27)の基底構造から(25)の文は派生され得るが、問題は、(25)の文は *The tall corn was grown by John* と同じ意味ではないことと、関係節の先行詞であり、NP₂ に支配されていて直接動詞の目的語ではない NP₃ を受動文の主語にするという無理があることである。更に、もし(25)の基底構造を(27)だとすると、関係節の先行詞である NP₃, *the corn* が主語になれるのは、能動受動文を作れる動詞であることと、動作を表わす動詞であることが条件になる。しかし、これらの条件も、次の文が非文法的であることからとってつけたものとなる。

(28) *The door was opened heavy by John.

(29) *Books were sold red by John.

次のような基底構造も考えられよう。



(30)の基底構造からも、S₂ に For-to 補文化要素配置規則を適用してから *the corn* を繰り上げて *grow* の目的語にし、受動化規則を適用して(25)の文は派生出来るであろう。しかし、*taste, smell, grow, open, burt, sell* 等の能動受動文を作れる動詞は、*hear, believe, expect* 等と違って、直接目的語に補文を取ることは出来ない。

(31) *John tasted that the grapes were son.

(32) *John grew that the corn was tall.

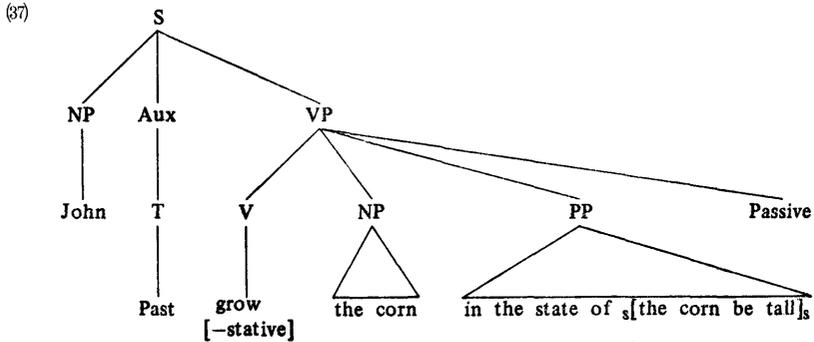
(33) *John tasted (for) the grapes to be sour.

(34) *John grew (for) the corn to be tall.

(35) *John tasted the grapes's being sour.

(36) *John grew the corn's being tall.

以上のことから、(17)の *John grew the corn tall* と *John grew the tall corn* の基底構造は同じではなく、更に、(25)の基底構造は(30)でもない。(25)の基底構造は次のようである。



(37)の基底構造なら、無理なく動詞の次の直接の目的語である *the corn* が受動文の主語になれば、更に、(28)と(29)が非文になる説明がつく。(19)の *John tasted the grapes sour* と(23)の *The grapes were tasted sour by John* が非文法的な文であるのは、*taste* が状態を表わす動詞である為であり、[+stative] の動詞には後で述べる主語—目的語交替規則 (Subject-Object Inversion rule) が義務的に適用される。

B. Dummy Subjectと主語—目的語交替

この章の初めに述べたように、能動受動文とは動作を受ける対象物が主語の位置に来て、*be + Ven + ……by + NP* の形は取らない。

- (1) The grapes tasted sour $\left(\left\{ \begin{array}{l} \text{to John} \\ *by John \end{array} \right\} \right)$.
- (2) The tulip smelled sweet $\left(\left\{ \begin{array}{l} \text{to John} \\ *by John \end{array} \right\} \right)$.
- (3) The corn grew tall $\left(\left\{ \begin{array}{l} *to John \\ *by John \end{array} \right\} \right)$.
- (4) The meat spoiled in the sun $\left(\left\{ \begin{array}{l} *to John \\ *by John \end{array} \right\} \right)$.
- (5) Books sold $\left(\left\{ \begin{array}{l} *to John \\ *by John \end{array} \right\} \right)$.
- (6) The house burned to the ground $\left(\left\{ \begin{array}{l} *to John \\ *by John \end{array} \right\} \right)$.
- (7) *The house built large $\left(\left\{ \begin{array}{l} \text{to John} \\ \text{by John} \end{array} \right\} \right)$.

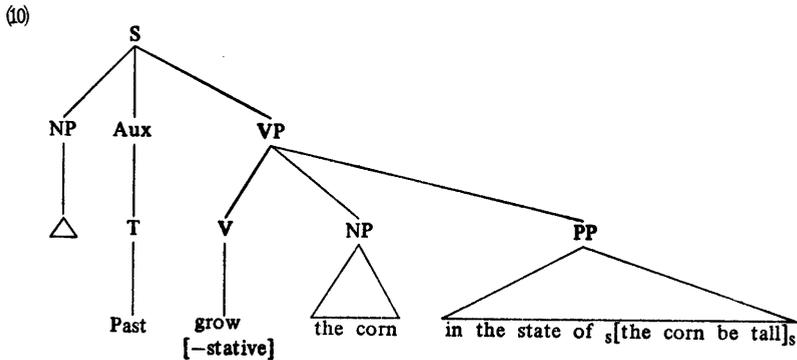
以上のように、動作主は *by + NP* の形で能動受動文には表われず、(1)と(2)のように、状態を表わす動詞は対象を表わす前置詞 *to* の次に [+animate] の名詞を従えるが、*to John*

は *by John* のような動作主の効力を失っている。

(8) *The grapes rudely tasted sour to John.

(9) *The tulip slowly smelled sweet to John.

(3)~(6)の文は、動作主が全く表われないので、動作主は *dummy* である。(3)の *The corn grew tall* の基底構造は次のようである。



the corn が *dummy subject* の位置へ移行する規則 (Subjectivization) が適用され、PP の *in the state of the corn be* が消去される。

(1)の *The grapes tasted sour to John* も(10)のような基底構造から派生されたもの、つまり、主語と目的語が交替したのではなく、基底構造に於いて動作主が *dummy* であり、*sour to John* や *sweet to John* を形容詞句 (Adjectival Phrase)、もしくは *to John* を VP から分枝する前置詞句 (Prepositional Phrase) として考えられないだろうか。もしそうだとすれば、次の文が正しい文であっても良いはずである。

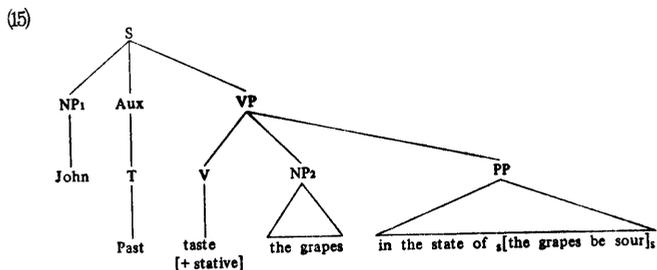
(11) *The grapes were tasted sour to John.

(12) *The tulip was smelled sweet to John.

(13) *The grapes were sour to John.

(14) *The tulip was sweet to John.

従って(1)の *The grapes tasted sour to John* の基底構造は次のようである。



John と NP_2 の *the grapes* は主語—目的語交替規則により、*the grapes* は NP_1 の位置へ、*John* は *to* を共なって PP の後へ移る。PP の *in the state of the grapes be* が消去されると(1)の文が派生される。このような派生は、動詞が [+stative] である場合にのみ起り得ることは云うまでもない。

to John のない *The grapes tasted sour* という文に於いては、動作主が全く表われていないので、動作主は dummy subject であり、(10)のような基底構造から *the grapes* が Subjectivization rule により Δ の位置へ移ったと考える。初めから dummy である動作主を、主語—目的語交替規則により *to* Δ とし、後で消去すると考える必要はない。もし *the corn grew tall* も主語—目的語交替規則が適用されたとするなら、次の文が文法的であるべきである。

(16) *The corn grew tall by John.

(17) *The meat spoiled in the sun by John.

(18) *Books sold well by John.

(7)の *The house built large* は非文であり、*build* は *make*, *keep*, 等の動詞と同じく能動受動文は作れない。次の文は *make* の場合の例文である。

(19) John made the garden beautiful.

(20) The garden was made beautiful by John.

(21) John made the beautiful garden.

(22) The beautiful garden was made by John.

(23) *The garden made beautiful $\left(\begin{array}{l} \text{to John} \\ \text{by John} \end{array} \right)$.

build は、例えば日本語では「(大きな) 家が建った」、「(大きな) 家が建っている」と云えるが、家そのものが建てないので現代英語では非文となる。

(24) *The (large) house built.

(25) *The (large) house is building now.

能動受動文(1)~(6)の進行形は出来る。

(26) The grapes are tasting sour.

(27) The tulip is smelling sweet.

(28) The corn is growing tall.

(29) The meat is spoiling in the sun.

(30) Books are selling.

(31) The house is burning to the ground.

状態を表わす動詞 *taste*, *smell* の能動受動文の形は SVC であり、SV の形は非文となる。

(32) *The (sour) grapes tasted.

(33) *The (sweet) tulip smelled.

(34) The (tall) corn grew.

(35) The (heavy) door opened.

同様に(32)と(33)の進行形も非文である。

(36) *The (sour) grapes were tasting.

(37) *The (sweet) tulip was smelling.

(34)と(35)の動作を表わす動詞はS Vの形を取れるが、動作主が行為を行う様態を表わす副詞は取れない。所が、動作主が省略されていても be+Ven…… の受動文は様態の副詞を取れる。従って、能動受動文である(38)、(39)と受動文である(40)、(41)はそれぞれ同じ意味ではない。

(38) The corn $\left\{ \begin{array}{l} *carefully \\ slowly \end{array} \right\}$ grew.

(39) The door $\left\{ \begin{array}{l} *carefully \\ slowly \end{array} \right\}$ opened.

(40) The corn was $\left\{ \begin{array}{l} carefully \\ slowly \end{array} \right\}$ grown.

(41) The door was $\left\{ \begin{array}{l} carefully \\ slowly \end{array} \right\}$ opened.

あ と が き

Kats-Postal-Chomsky の Manner→by[^] passive という提案に対し、批判めいた論文になってしまったが、なぜ能動文で様態の副詞を取れる文でありながら受動文が不可能なのか、なぜ様態の副詞を取れない動詞が受動文を作れるのか、といった問題をより明確に説明するには、単に様態の副詞と受動態を形の上で考えるよりも、ある行為が行われる過程での様態の副詞と動詞の関係を意味的にもっと深く追求することが必要である。それが、様態の副詞とは何か、受動態とは何かという問題の解明になるであろう。この点に於いて、本論文は多くの欠点不備を残している。更に、疑似受動文だけを見るなら問題は明確にされるとしても、能動文、例えば、*He lived in this house* や *He slept in this bed* の前置詞句が、VP に支配されている場合と、VP の外にあり述部句か Sentence に直接支配されている場合とが考えられるなら、これら2つの文は意味的にどのようにあいまいなのだろうかという問題が残る。

参 考 文 献

Chomsky, Noam, *Syntactic Structures*, The Hague: Mouton, 1957.

- _____, *Aspects of the Theory of Syntax*, Cambridge: M. I. T. Press, 1965.
- Fillmore, Charles, J., "The Case for Case", *Universals in Linguistic Theory*, ed. by E. Bach and R. Harms, New York: Holt, Rinehart and Winston, pp. 1-88, 1968.
- 福村虎治郎、「英語態 (Voice) の研究」、北星堂、1965。
- 堀口六寿、「英語様態の副詞の諸問題」、『新潟大学教育学部紀要』、第15巻、1973。更に『英語学論説資料』、8、pp. 70-81。昭和49年分 (1974)。
- 後藤正紘、「能動受動構文について」、『岐阜大学研究報告 (人文科学)』、第20号、1971。更に『英語学論説資料』、5、pp. 9-14。昭和46年分 (1971)。
- Huang, Shuan-Fan, *A Study of Adverbs*, The Hague: Mouton, 1975.
- Kats, Jerrold J. and Paul M. Postal, *An Integrated Theory of Linguistic Descriptions*, Cambridge: M. I. T. Press, 1964.
- Kuroda, S-Y., "Some Remarks on English Manner Adverbials", *Studies in General and Oriental Linguistics*, ed. by R. Jacobson and S. Kawamoto, Tokyo: Tokyo Institute for Advanced Studies of Language, pp. 378-395, 1970.
- Rosenbaum, Peter S., *The Grammar of English Predicate Complement Constructions*, Cambridge: M. I. T. Press, 1967.